

LITERA-AFRICA  
COLLECTION

# アフリカ文学の愉楽

全6巻

【編集委員】

栗飯原文子

桑田光平

中尾沙季子

中村隆之

福島亮

国書刊行会



四六変型判／上製ジャケット装／各巻平均 300 頁  
平均予価 2,600 円＋税／装幀＝羽毛田顕吾（ブーザンゴ）

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村 1-13-15

TEL: 03-5970-7421 FAX: 03-5970-7427

URL: <https://www.kokusho.co.jp> Mail: [info@kokusho.co.jp](mailto:info@kokusho.co.jp)

「シリーズ刊行にあたって」

## ★現代アフリカ文学の最前線を紹介する一大シリーズ!!

小社の海外文学路線を切り拓いた《世界幻想文学大系》、のちのブームを決定つけた《ラテンアメリカ文学叢書》の刊行開始から約半世紀。これまで日本で語られることの少なかった二十世紀後半から現代までの芳醇なアフリカ文学の世界を本格的に紹介すべく、そして遠く離れた日本の読者が抱くアフリカへの印象をより豊かなものとすべく、本シリーズをここに刊行する。

収録される作家の多くは、本邦初訳にして、本邦初紹介となる第一線で活躍する作家である。また、ひとつの地域や特定の言語圏の作家ではなく、できる限りさまざまな立ち位置の作家による作品の収録を心がけた。

収録作品の選定にあたっては、まずなによりも本シリーズのどれか一冊でも手にとってくださった方々を愉しませ、驚かせられるような「物語」としての面白さと強度をもった文学作品であることを重視した。

《アフリカ文学の愉楽》。それは甘いかもしれないし、苦いかもしれない。「あなたの人生を決定づける」傑作かもしれないし、「なんだこれは!？」と思わざるを得ない摩訶不思議な怪作かもしれない。しかし、読書とは、ひいては芸術の愉楽とは、「触れてみたいとわからないものに触れてみる」、その大いなる賭けではないだろうか。

本シリーズでしか味わうことのできない、読書の愉楽がここにある。

国書刊行会

## ★アフリカ文学を読むことは世界への扉を開くこと

【推薦の言葉】

アフリカ文学は、その誕生と発展の時代と言われる一九五〇年代・六〇年代以降の歴史において、いまもっとも活気づき、もっとも花開き、世界的な流行を生んでいる。背景にあるのは、アフリカに出自をもつ文学者があらゆる移動の軌跡をたどりながら、大陸と世界を往来している状況だ。作家と作品の帰属が国や大陸、言語を横断することで、アフリカ文学の定義がますます複雑になるとともに、新たな可能性と展望が開かれている。

かつて作家たちはアフリカ文学というひとつの軸に結集し、歩んでいくとした。それは国家独立、脱植民地化の時代に掲げられたプロジェクトでありヴィジョンであった。現在、新しい時代に入り、その始まりの夢と理想、先人の歩みと功績は継承されつつも更新され、これまでにない挑戦や実験がおこなわれている。

こうしたアフリカ文学の現在地は、大陸と海をまたいで大きく広がるコミュニティないしはネットワークと言いつける。この巨大で不定形な集合体は、作家をはじめ翻訳家や文芸活動家、編集者など、大陸内外で創作と出版にかかわるアフリカ（系）の人びとの努力により成立している。そして、そこから生み出されるのは色とりどりの美しく豊かな物語——多種多様な（アフリカ）だ。

さまざまな土地で、さまざまな言語で表現されるいくつもの（アフリカ）は世界への扉である。わたしたちにとって、この（アフリカ）は物理的にも心理的にも遠いかもしくない。だが、はるか彼方の時代や場所に生きる人びとの心情や経験への共感を誘うのが文学の想像力であるならば、アフリカ文学が映し出す、通常は知れない生命のきらめき、人間模様、喜びと苦悩、愛と勇氣、明日への希望を身近に感じ、いとおしく思うことができるだろう。

粟飯原文子（法政大学国際文化学部教授）

## ★人はどうやってアフリカと出会うのだろうか？

日本で暮らす多くの人は、アフリカと出合い損ねたまま一生を過ごすのではないだろうか。しかし、それはあまりにもったいない。どの国にしても、アフリカは私たちから遠い。物理的にはもちろん、心理的にも。だが、もしかしたら、心理的な遠さを作り出しているのは、私たち自身なのかもしれない。かくいう私もそうだった。ネットの情報も、旅行系 YouTuber の Vlog も、専門家の文章もいけれど、まずはアフリカ自身が紡ぐ物語に耳をかたむけてみよう。いまのアフリカの声に。あの広大な大陸よりもずっと大きな広がりが私たちを待っているはずだ。こんなことなら、もっと早くに出会っておきたかった。

桑田光平（東京大学大学院総合文化研究科教授）

## ★アフロフォニーの世界へ

〈アフリカ〉は世界へと開かれた窓である。本シリーズに収録されている作品はどれもまさに、その世界性において〈アフリカ〉的なのだ。〈アフリカ〉を描くことは、世界のなかの存在としての姿（figure-monde）を再現することである、とアラン・マバンクはいう。

アフリカにルーツをもち、英語、フランス語、ポルトガル語で執筆する作家たちはしばしば、それぞれの出身国を植民地化した旧宗主国の言語圏ごとに取りあげられてきた。しかしこれまでも多くの作家たちが主張してきたように、それらはもはや旧宗主国が特権的に専有する言語ではなく、使用者たちによってその輪郭と可能性を大きく広げられ、新たな世界をつくることばである。レオノラ・ミアノはこうした境界横断的で多声的な、遭遇と創造の場を「アフロフォニー」と表現する。

果てしなく広がるアフロフォニーの豊かな世界へと誘われる愉楽を、ぜひ味わってほしい。

中尾沙季子（東京大学大学院総合文化研究科専任講師）



## ★自分だけの密かな地図を求めて

どんなに世界が広大であっても、その広大さを感じる事ができるかどうかは、ひとえに私たちの想像の領域の豊かさにかかっている。いまアフリカで起きていることやかつて起きたことについて、この大陸に出自をもつ作家たちの思考とその表現を知ることが、従来のアフリカのイメージを大きく揺さぶり、未知の展望を切り拓き、新鮮な感性を育むだろう。

今回のシリーズに収められるものは、日本での認知はまだ低いかもしれないが、いずれも大きな文学賞をとったことのある実力作家の重要作だ。アフリカの作家に一般に期待されるようなイメージを良い意味で裏切るだろうこれらの作品は、「海外文学」や「世界文学」といった枠組みをはるかに越えて、私たちの想像域を深く遠くへ広げてくれるはずだ。「アフリカ」を最初の合言葉に、各々が自分だけの秘密の地図を作成しながら、この魅惑的かつ思索的な新たな想像の世界をどこまでも旅してみよう。

中村隆之（早稲田大学法学学術院教授）

## ★「アフリカ」文学の百年

往々にして忘れられがちなことではあるけれども、「アフリカ」文学は、つねに〈私たち〉のそばにあった——大正十一年（一九二二年）に改造社から刊行されたルネ・マランの『バツアラ』から、一九五〇・六〇年代のアジア・アフリカ文学運動、そして反アパルトヘイト運動を経て現在に至るまで、日本における「アフリカ」文学の翻訳と紹介には、百年の厚みがある。目立たないけれども大切なこの百年の厚みは、「アフリカ」という茫漠とした呼称によって決して一括りにできない土地の過去によって、また、そこから世界中に離散した人々のうねりによって一層複雑さを増しながら、全一世界のざわめきの一部をなしている。

《アフリカ文学の愉楽》叢書は、この百年の厚みに、幾枚かの言葉の織布をもたらそうとしている。現在を生きる作家たちが紡ぎ、織りあげ、言葉の汽水域に胸まで浸かった翻訳者たちが岸から岸へと渡すこれらの布を、どうかあなたに受け取ってほしい。時に軽く、時に重い、それらの布の感触を心ゆくまで愉しんで、普段着や晴れ着に仕立てて素肌に纏ってもらえたら、あるいは、はじめはこわばっていた繊維が、あなたの歳月とともにしなやかなものに変わったら、渡守のひとりとして、こんなに嬉しいことはない。

あなたのものになることで、この国の言葉たちのうちに散らばっていた「アフリカ」文学の百年は、新たに息を吹き返す。

福島亮（富山大学人文学部専任講師）



## 割れたグラス

桑田光平 訳

コンゴ共和国の港湾都市ポワントノワールの下町にあるバー「ツケ払いお断り」。バーの主人《頑固なカタツムリ》からの依頼で、『割れたグラス』はバーとその常連客たちとの日々を思いのまま一冊のノートに書き留めていくことになる。

何枚ものオムツを穿いた《パンパース男》、フランスかぶれの寝取られ《印刷屋》、誰よりも長く放尿できると豪語する《蛇口女》など、いずれ劣らぬ酔客たちの奇怪な逸話が次々とノートに綴られていく。やがて『割れたグラス』は自身についても書きはじめるのだが……。

現代アフリカ文学随一のヒップスター、アラン・マバンクによる代表作。

【第1回配本】 定価二六〇〇円＋税

ISBN 978-4-336-07694-6

## ヤマアラシの回想

桑田光平・福島亮 訳

その国には、分身遣いがいるという——《分身》として生き、人を殺めることを定めとされた一匹の雄ヤマアラシ。人間と動物、人間と精霊、この世とあの世のあいだの中間的存在である彼は、みずからの来歴とこれまで目撃してきた人間界の悲喜劇をバオバブの老木に向かって語りはじめる。アフリカ社会に残る神話や迷信、異常なまでに書物へ執着する男、ヨーロッパから来た白人の民俗学調査団、そして奇妙な力をもつ謎の双生児……。《人間》の内奥を抉り出す、マバンクのルノドー賞受賞作。

【第3回配本】 定価二八〇〇円＋税

ISBN 978-4-336-07695-3

## MÉMOIRES DE PORC-ÉPIC

## VERRE CASSÉ



photo: © Lorenzo Piano

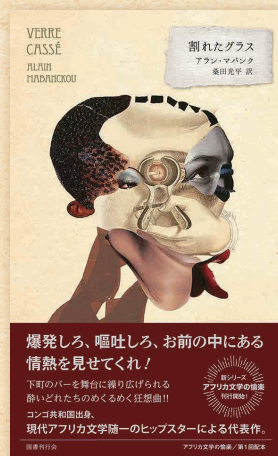
### アラン・マバンク

Alain Mabankou

(1966-)

コンゴ共和国ポワントノワール生まれ。首都ブラザヴィルの大学で学んだのち渡仏、法律コンサルタントとして働く傍ら、詩人として出発する。『割れたグラス』ではフランコフォニー五大大陸賞をはじめ数々の文学賞を受賞、『ヤマアラシの回想』ではルノドー賞を受賞する。

二〇〇六年からカリフォルニア大学ロサンゼルス校の教授となり、二〇一五年には国際ブックナー賞のファイナリストに選出、さらには作家としてはじめてコレージュ・ド・フランスの招聘教授に就任する。二〇二二年の国際ブックナー賞では選考委員を務める。



アラン・マバンク『割れたグラス』  
装画ニワンゲシ・ムトゥ

爆発しろ、嘔吐しろ、お前の中にある情熱を見せてくれ！

下町のバーを舞台に繰り広げられる酔いどれたちのめくるめく狂想曲!!

コンゴ共和国出版、現代アフリカ文学随一のヒップスターによる代表作。

訳者：桑田光平 アフリカ文学の発展、第1回配本

## 夢遊の大地

伊藤秋仁 訳

長引く内戦で荒廃したモザンビーク。難民キャンプで出会った老人トウアイルと記憶喪失の少年ムイディングは、内戦から逃れるため、あてもなく道路を彷徨う。焼け落ちたバスの傍らで、ふたりはある男が書いたノートを見つける。書いたのはキンヅ。ふたりはノートを読みながら移りゆく風景を歩き続ける。ノートとともに、夢遊の大地に翻弄されるふたりが行き着く先は……。

言葉遊びや詩的な描写を自由自在に駆使して、アフリカの幻想と現実が入り混じったイメージを浮かび上がらせる、ミア・コウトのデビュー作にして世界中で読み継がれる代表作。

【第2回配本】 定価二八〇円＋税  
ISBN 978-4-336-07697-7

## エルミナ

福島亮 訳

妄想か、はたまた現実か——読書に惑溺する少女エルミナと、彼女の家を間借りしつつ『エルミナ』と題した小説の執筆に耽る青年エヘルト。キューバ、メキシコ、そしてフランスへ向かう彼らの移動を通して描き出されるのは、自由奔放な性的妄想と淫靡な実践の数々である。だが、やがて亡命にともなう現実には彼らの生を蝕んでゆき……。

「アフリカのサド」の異名をほしいままにするサミ・チャックが、プラトンから山田詠美、さらには作中小説『エルミナ』まで、めくるめく引用を重ねながら綴る、悦楽と残酷に満ちた代表作。

ISBN 978-4-336-07696-0

HERMINA

TERRA SONÂMBULA



photo: ©Alfredo Cunha

ミア・コウト

Mia Couto  
(1955-)

ポルトガル人移民の子としてモザンビークのベイラで生まれる。十代から文学活動をはじめ、ジャーナリストとしてモザンビークの独立や内戦に立ち会う。一九八五年にジャーナリストを辞し、生態学を専門とする生物学を学ぶ。一九九二年に長編処女作である『夢遊の大地』を発表。本作はジンバブエ国際ブックフェアが選定する「20世紀のアフリカ文学ベスト12作」の一作に選出される。以降も精力的に作品を発表し続け、二〇一三年にはカモンイス賞を受賞、二〇一五年には国際ブッカー賞のファイナリストに選出されるなど、ポルトガル語圏の国々のみならず世界的にも高く評価され、数多くの文学賞を受賞している。



photo:  
Francesca Mantovani  
©Editions Gallimard

サミ・チャック

Sami Tchak  
(1960-)

トーゴ、ボウウンダ生まれ。一九八六年にフランスに渡り、一九九三年にパリ第五大学で社会学の博士号を取得した。一九九〇年代後半から、売春の社会学的調査のためにキューバやメキシコに滞在し、その体験をもとにラテンアメリカを舞台とする『お祭り広場』（二〇〇一年）、『エルミナ』（二〇〇三年）、『仮面祭』（二〇〇四年）といった一連の作品を執筆。『仮面祭』でブラック・アフリカ文学大賞を受賞する。二〇一一年刊行の『マリ人アル・カボネ』以降、小説の舞台をマリ、ギニア、カメルーンに移し、現在に至るまで旺盛な創作活動を続けている。

## 影の季節

粟飯原文子 訳

ある夜、ムロンゴ一族の村で大火災が発生し、十人の若者と二人の長老が姿を消す。何が起こり、なぜ彼らが失踪したのか誰にもわからない。母たちは不可思議な夢を見て、行方不明の息子の声を聞く。一連の出来事を解明するために、首長ムカノは従者を連れて隣国ブウエレに赴き、女王に面会を求めようとする。同時に、母のひとりエヤベが息子を追って「水の国」へと旅立つ――。

ミアノの故郷、カメルーンのドウアラを舞台のモデルに、大西洋横断奴隷貿易初期の経験が共同体の内在的な視点から描かれる。フェミナ賞、メテイス小説大賞受賞作。

ISBN 978-4-336-07698-4

## フレッシュウォーター

粟飯原文子 訳

ナイジェリア南部に暮らす主人公アダは気性の激しい扱いにくい子どもだった。アダはオバンジェエ。イボの言い伝えによれば、精霊オバンジェエとして生まれた子はたいてい幼いときに死ぬが、アダは生き延びて十六歳で大学進学のために渡米する。やがてアダの中の精霊／自己たちが力を増していく、痛ましい事件の後、名前を持つ存在が前面に現れ、身体を支配するようになる。

「複数のわたし」と対話し、折り合いをつけることとはどういう経験なのか。いま世界でもっとも注目される作家のひとり、エメズイの鮮烈なデビュー作にして自伝的小説。

ISBN 978-4-336-07699-1

## FRESHWATER

## LA SAISON DE L'OMBRE



photo: ©Elom 20cc

レオノラ・ミアノ

Leonora Milano  
(1973-)

カメルーン、ドウアラ生まれ。一九九一年にフランスに渡り、大学でアフリカ系アメリカ文学を学ぶ。二〇〇五年『夜の内側』でデビュー、二〇〇六年の二作目『来たる日の輪郭』で高校生が選ぶゴンクール賞を受賞。この二作品と二〇〇九年刊行の『緋色の夜明け』はアフリカ三部作と称される。二〇一一年、それまでの全著作に対してブラック・アフリカ文学大賞を受賞。二〇一三年には『影の季節』でフェミナ賞、メテイス小説大賞を受賞。小説、戯曲、エッセイを執筆するかたわら、インドのコルカタを拠点とするシーガル出版で『キロンボラ!』コレクシオンを監修、またトーゴの首都ロメでキロンボ出版を設立する。



アクウェケ・エメズイ

Akwaeke Emezi  
(1987-)

ナイジェリア、ウムアヒア生まれ。父はナイジェリアのイボ人、母はマレーシアに移住したスリランカのタミル人家系。十六歳で大学進学のためにアメリカに渡る。自身がノンバイナリー・ジェンダーであると公表し、作品でもクイアやトランスジェンダーを扱う。二〇一八年のデビュー作『フレッシュウォーター』はPEN／ヘミングウェイ賞、女性小説賞の最終候補に、二〇一九年、ヤングアダルト小説『ベット』は全米図書賞児童文学部門の最終候補に、二〇二〇年『ヴィヴェク・オジの死』はニューヨーク・タイムズ紙のベストセラーリストに選出された。映像や音楽にも取り組んでいる。



# LITERA-AFRICA

COLLECTION

## TOGO

Sami Tchak  
*Hermine*

## NIGERIA

Akwaeke Emezi  
*Freshwater*

## CAMEROUN

Léonora Miano  
*La Saison de l'Ombre*

## CONGO

Alain Mabankou  
*Verre Cassé*  
*Mémoires de Porc-Épic*

## MOÇANBIQUE

Mia Couto  
*Terra Sonâmbula*

